

若手プランナーが考えるこれからの「まちづくり」

12月10日、まちづくりセンターにおいて、20代30代の若手都市計画プランナーを中心としたグループ「プランナーズネットワーク神戸」のメンバー高木優子さん(コベルコピーアールセンター)、田中正人さん(都市調査計画事務所)、中川啓子さん(ジーユー計画研究所)、松原永季さん(studio CATALIST)、山本和代さん(遊空間工房)と、「コンパクトタウン」づくりを推進する神戸市職員との交流・意見交換が行われました。

今号では、当日出された意見を中心に若手コンサルタントの皆さんが、「まちづくり」に対してどのようなイメージを持って取り組もうとしているのかを紹介します。

※「○」は、若手都市計画プランナーの方の意見です。

「コンパクトタウン」とは

市民が「わがまち」と認識できる範囲(地域)の中で、安心して住みつづけることができるまち。また、このようなまちの実現に向けて、住民が主体となり、地域の個性(歴史、文化、景観など)を活かしながら、様々な地域課題の解決に総合的に取り組んでいるまちのことです。

■「参加性」「継続性」を保つために

— 自分のまちに興味を —

○ 地元生まれ育った方には「わがまち」という意識があり、地域のいろいろな組織にも積極的に参加されるのですが、賃貸住宅にお住まいの方や学生など、組織に入らない人をどう自分のまちに興味を持ってもらうか、という話が、これからは大事になって行くんじゃないかな、と思います。

○ ある一定期間盛り上がり、まちが良くなっていく時点では良いのですが、結局持続していくかどうかです。

— 内発的なまとまりを —

・そもそもまちづくり活動って、楽しくなければ続かないと思うんです。まちづくりの成果は10年20年というスパンで考えないといけませんし、その場合、やはり継続性が大事なんです。

○ 内発的なまとまりから考えていかないと、仕組みとしては長く続かないんじゃないかな、という気はしますね。

○ まちづくりを担う組織の母体が自治会である場合、その組織はしばしば「自治会代表者の集まり」という雰囲気になりがちです。しかしイベントなど実際の活動を行うためには、なるべく多くの人が集う必要があるわけです。そのことが実感できれば「参加」の意味もすいぶんと開かれるように思います。同時に、既存組織に抛らない人々の側の積極的な意識を引き出していくような、組織内での位置づけも戦略的には必要だ

と思います。

— 地域活動は、子供中心に —

・若い世代に参加してもらおうヒントとしては、地域活動に子供たちを巻き込む、ということはどうでしょう。子供が小学校低学年ぐらいまでのお父さんお母さんは、その時期に地域に入っただけのチャンスがある、と思うんです。

○ 子供たち自身も小さい時から地域とのつながりを持つという、例えば若い男の子がだんじりの時に集まって地域のことをする、という経験も大切だと思います。その人が一生その地域に住むわけではありませんが、将来違うまちに行ったとしても、そこでやはり「このまちは寂しいから、こんなの作ってみようか」みたいな『種まき』ができる、そういう考え方の基には、やはり小さい時に地域と関わる機会が重要なと思いますね。

■キーワードは「イベント」と「情報共有」

・最近、まちづくりにはいくつかキーワードがあるなあと思い始めてまして、一つが「イベント」、もう一つが「情報」なんです。コンパクトタウンを作るとっかかりはこれかなと思います。

○ 深江では最近、地元の主婦の方が、子供会や自治会のイベント等の身近な地域情報を流すミニコミ誌をつくりたいという提案をされ、まちづくり協議会とも連携して協議会の情報も掲載し、実際に発行し始めています。行政や自治会で流すニュースペーパーに(4面へ)

男女共同参画をめざす市民のつどい2002開催

「男女共同参画」という言葉を知っていますか。これは、「女だから」「男だから」と性別によって分けてしまうのではなく、個人の個性が尊重される社会、男女が対等にあらゆる分野に参加・参画し、責任を分かち合う社会をいいます。

国は、平成11年6月に「男女共同参画社会基本法」を制定・施行し、神戸市でも、平成10年9月策定の「こうべ男女共同参画基本プラン21」に基づいた取り組みを行っています。

「男女共同参画をめざす市民のつどい2002」は、この「男女共同参画」について、皆さんの理解と認識を深めていただき、だれもが暮らしやすい社会を実現させるため、毎年行っているものです。

この機会に、ぜひご参加いただき、家庭、地域、職場などでの取り組みについて考えてみてください。

◆日時 平成14年2月7日(木)
14:00~15:30

◆場所 神戸文化ホール・大ホール
(神戸市中央区楠町4-2-2)

◆講演 「女と男、いまが変わりどき」

◆講師 おきらじ のりこ
沖藤 典子さん
(ノンフィクション作家)

◆申込み方法

1月7日(月)より申込み受け付けをします。
電話・ファックス・ハガキ・E-mailでお申込みください。

必要事項 【住所、氏名、電話番号、一時保育(2歳~就学前)の有無】を記入のうえ
〒650-8570 (住所不要)

神戸市市民局男女共同参画課「市民のつどい係」

TEL 078-322-5179

FAX 078-322-6034

E-mail: danjyo@office.city.kobe.jp



沖藤 典子さんのプロフィール

女性・老人・福祉など現代社会が抱える諸問題を探求し続ける作家・評論家。北海道大学文学部卒業。大学卒業後、(株)日本リサーチ・センターに入社、その後、調査部第2企画室長になる。その間に結婚、出産、子育て、老父の入院と看護、夫の転勤、子どもの受験など家庭をもつ女性なら誰しも体験する数々の問題に遭遇。しかし、「女はダメだ!」という指をさされないために休日返上し、歯をくいしばって頑張るも理解されず、父の死を経て、ついに職場を退職したという苦い思い出をもつ。その時の体験を著した「女が職場を去る日」はベストセラーとなる。ノンフィクション作家として、活躍を続けるかたわら神奈川県女性問題協議会前会長、日本介護福祉学会理事、相模原市女性計画推進協議会委員、日本社会福祉士会理事、高齢化社会を良くする女性の会理事・運営委員などを務める。

または、

〒650-0016神戸市中央区橘通3-4-1
神戸市婦人団体協議会「市民のつどい係」
まで、お申込みください。

歴史をいかしたまちづくり1～イタリアでの取り組み～

◆はじめに

イタリアはご存知のとおり、歴史が古く、またそれらが多く残る国です。イタリアでは歴史的都市部は「チェントロ・ストリコ」と呼ばれ、都市計画的にも重要性が位置付けられています。歴史的都市の保存については、ポーロニャでおこなわれた住宅再生事業をはじめとして世界的にも有名で、歴史を活かしたまちづくりが各都市で進められています。

その一方で、イタリアでもモータリゼーションが進み、チェントロ・ストリコ内での交通渋滞やそれによる排気ガス、路上駐車といった問題が表面化、慢性化していました。近年は環境問題への関心の高まりもあり、1992年から全国的に業務用と居住者用の車両以外はチェントロ・ストリコ内へ進入することが禁止されています。許可証を持たない車両は地区内へ入ることはできず、違反車両に対しては警察による取締りが行われています。都市の規模が大きくなるにつれて効果は薄くなりますが、チェントロ・ストリコは歩行者のまちとなりつつあります。

そこで、今回から3回にわたっては、これらの背景の中で行われているいくつかの都市の歴史的まちなみの保存・再生への取り組みを書きたいと思います。

◆コモでの取り組み

コモは、ミラノの北約50kmに位置し、湖があるため夏はヨーロッパ各地からの避暑客で賑わう都市です。もともとは、ローマの植民都市として発展しました。コモ湖北側から敵が攻めてくるのを見張るための要塞として、約2,000年前に城壁が建設され、それが今も部分的に残っています。この城壁の内部を中心として1931年にチェントロ・ストリコを指定し、保存への取り組みを始めています。チェントロ・ストリコ内の建築物に対する規制は、各都市の条例にもとづいて決められており、内容は都市によって異なります。ここコモでは、ある程度時間の経過した歴史的建築物は、元の状態に修復するか建築された当初の状態に戻すかのいずれかに決められています。また歴史的建築物の持つ価値を考慮するという点から外壁はもちろんのこと、内側の仕切り等もそのまま残すことが決められています。

これらの個々の建築物に対する保存のほか、まちなみ保存への取り組みも進められています。その一つが地区内の道路舗装です。約200年前までは馬車が使われていたため、大きさの違う玉砂利敷とされていま

した。自動車が走りにくいという機能性を重視したため、一度はこれをアスファルト舗装としましたが、車輛進入規制をおこなうと同時に歩行者空間の整備を始め、以前のデザインをいかした舗装を取り入れていま



当然使用する石材はコモの近くで採取された地場のものです。同じように、まちの広場は以前は行き場のない車の駐車場として整備されていましたが、広場として再整備され、今では人々が憩う空間として、まちの賑わいに一役かっています。



チェントロ・ストリコ内は建築物の増改築の制限から大規模な店舗等はほとんどなく、専門店が多くみられます。それぞれの店舗は道路に面してショーウィンドーを設け、まち行く人の目を楽しませています。



イタリアでは夕方の散歩を習慣としている人が多く、みんながゆったりとまちなかで散歩を楽しむ姿は、まるでチェントロ・ストリコ全体が公園となっているようで、まちの新しい使われ方を発見したようでした。

いちのほ ちゅうご
一岡 泰子 (都市計画局まちづくり支援室)

加え、広い深江の地域の端と端をつなぐような、隙間を埋めてくれる役割として、地元の方が手を上げてくれたのは素晴らしいと思います。

・情報でいえば、かつて市街地にあった「わがまち」というエリアが、今は見えなくなったのじゃないかな、と思います。そこがまちづくりの母体の一つになってくると思います。そういう「わがまち」意識復活のために必要なファクターは、やはり楽しさを重要視した「イベント」であるでしょうし、地域の「情報の共有化」ということかなと思います。

■新しいタイプのコーディネーターが求められている？

ー 地域でコーディネートする役割が必要 ー

○先日、災害が起こった時などに全国各地から集まってくるボランティアの皆さんと行政との間を橋渡しして、ある一定の仕組みを作るまでの仕事をする、「ボランティアコーディネーター」の存在を知りました。それに近い形で、地域のコーディネートができる、というような役割が必要かと思います。行政の仕組みとしては、住民に最も近い区役所の役割が拡充されたり、中立的な立場を得やすい「まちづくりセンター」の機能が重視されることが求められるでしょう。

・そういう事ができるのは、コンサルタント的な人だったり NPO だったり、ちょっと第三者的な中立的な人かなあ、と思います。

ー「生活の総合性をコーディネートする」という機能 ー

○今、私たちのネットワークの人たちがやろうとしているのは、生活の総合性をきちんとコーディネートしていく、という部分かなと思います。それを都市計画プランナーだけがやってしまうのは良くない。もっと

広がりのある話ですから、他の領域の人も、コンサルタント、コーディネーター的役割で関わっていくべきじゃないか、他の専門性を持つ人が加わっていくべきじゃないかと思います。

・そういう新しい職能ができる可能性はあると思います。いわゆる「生活総合コーディネーター」という職能が生まれてくるでしょう。

○そうなった時、一人の人間が全部のことをやる、とコンサルタントという考え方ではなく、何人かがある地域を担当し、そのコンサルタントに関してもいろんなジャンルの方に入ってもらって進める方が、まちづくりそのものが豊かになるようなイメージを持っています。

ー 地域の人々の中にボランタリーな専門性を見出す ー

○ボランティアとはリスク回避のための「投資」、自分がボランティア活動をすることでその領域を活性化し将来のリスクの補填をする、ということだと言われます。まちづくり活動の多くはボランティアであり、またボランティアにもさまざまな専門性があります。つまり、「専門家」と「地域」という構図を前提するのではなくて、地域の人々の中にさまざまなボランタリーな専門性を見出していくような方向性も大切だと思います。

○あるまちづくり協議会準備会でもホームページが作られているのですが、やはり会社の業務で慣れている方がいらっしゃるようです。そういう見えない資源というか、人材を発掘する必要があると思いますね。

○もちろんそのためには地域に受け皿が必要で、例えばそれが NPO で、地域の内外のスタッフがそこに集まってくるような形になればいいなと思っています。

すまい・まちづくりのご相談は

■すまい・まちづくり人材センター

(こうべまちづくり会館 3F)

電話 078-361-4377 FAX 078-361-4584

受付は、月・火・木・金曜の午前 10 時～午後 5 時

■土・日・祝日は

事前にご連絡ください。

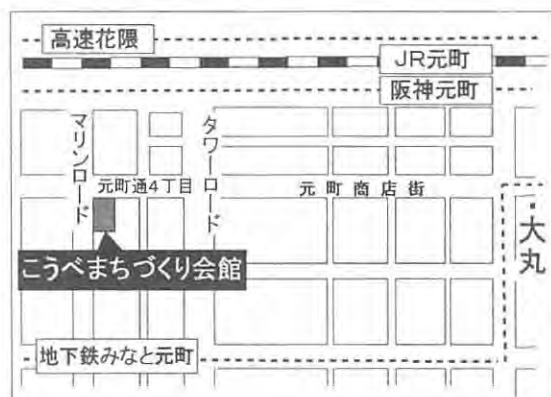
自治会活動などのご相談は

■コミュニティ相談センター(まちづくり会館 4F)

会報等の印刷サービスや学習会へのインストラクター派遣など

受付:午前 10 時～午後 6 時(水曜・年末年始は休館)

電話 078-361-4565



最寄駅

地下鉄海岸線みなと元町駅西口から 1 分

高速花隈駅東口から 3 分

高速西元町駅東口から 5 分

JR・阪神元町駅西口から 8 分